

入選

## 親切とお節介

福岡県 福岡雙葉中学校 二年

山崎 蒼生

相手の小さな親切で、救われることもあれば傷つくこともあると私は考える。この日本に「お節介<sup>まつかい</sup>」という言葉が存在するように、「小さな親切」で他人を不快にさせることもあると思ったからだ。

なぜそう考えるようになったのか。それは、小学校までさかのぼる。当時私は、体育の授業がいちばん苦手で嫌いだった。縄跳びに跳び箱、マット運動に球技。これらすべて運動神経など関係なく、私は誰よりも劣った状態から始まる。

それは私が、<sup>じょうし</sup>上肢の欠損という障がいを持っているからだ。私には左手がない。しかし、ほかの体の不自由な人に比べれば、私はまだ軽い方だ。右手はあり、両足もある。目が見え耳が聞こえ、言葉を発することもできる。

しかしそれは、世界という大きな枠組みで見た場合であり、今回はクラスという小さな枠組みで考えた場合だ。当然私だけが、みんなの「普通」と違う。縄跳びも跳び箱も、マット運動も球技も手がないため、するたびに痛みを伴い、最悪の場合、内出血を起こしてしまうのだ。

ただ痛みをたえて必死にやっている私よりも、話しながら遊んでいるあの子の方が早くできるのは悔しくて、恥ずかしくてしかたがない屈辱だった。

「どれだけがんばっても、がんばらないあの子には届かない。」

これは、幼い私に自信をなくさせるには十分すぎる苦痛で、それから「どうせできない」とあきらめてしまうこともあった。前に、練習してケガをしてしまったこともある。できるように、みんなに追いつくように練習する私を見て、みんなが言う。

「山崎さんは左手がないから、できなくて当たり前。」

きっと気づかいで、優しさで、励ますために言ってくれたのだと思う。しかし、私にはそう聞こえなかった。何時間も痛みを耐えながら、「できる」そう信じて練習した時間を、行動をたった一言で否定されたと感じたからだ。善意で放った言葉が心にグサグサと刺さり、自分に希望を見出せなくなった時期もあった。

私の体験談を挟み話したが、私は相手の小さな親切で心救われることもあれば、変な気づかいで傷つけてしまうこともあると考える。

気持ちを打ち明けるだけでもずいぶん気持ちが楽になることは、誰でもわかっていることだろう。だからこそ、一方的にほめたり気づかたりせず、本当に相手が苦しんでいたりと悩んでいるときこそ、声をかけてあげること、考えや行動を認めてあげることが困っている、悩んでいる人にとって一番の小さな親切だと私は思う。